

劉丹

## 1. 事業実施の目的

本計画の目的は、2024年8月17日および8月18日にかけて、タイ（バンコク）において行われる亜洲食学論壇に発表者として参加することである。また、現地滞在中、タイの華人街でのハス（蓮）の販売や利用状況に関する聞き取り、情報収集を実施することである。

## 2. 実施場所

タイ（バンコク）

## 3. 実施期日

2024年08月15日（木）～2024年08月21日（水）

## 4. 成果報告

### ●事業の概要

#### A. 調査活動

##### 1. 研究の目的と概要

中国では2000年代初頭に農地制度の改革が打ち出された。それは、農業経営の零細化という問題を是正することで、農民の収入を増加させ、食料生産を安定させる目的であった。本研究は農地制度の改革というプロジェクトを取り上げる。開発の人類学の視点から、中国における内陸農村の事例を中心に、政府による農業の集約化・近代化が進められるなか、①農民がどのように農地制度の改革に対処しているのかを民族誌的に記述し、②農村社会がどのように変化してきたのかを明らかにすることを目的とする。調査対象は内陸農村部のハスの大規模栽培集団とする。今回の現地調査の目的はタイの華人街でのハスの販売や利用状況に関する聞き取り、情報収集を実施することである。

##### 2. 調査の内容

ハスは仏教において極楽浄土に咲く聖なる花として認識されており、宗教的な場面でハスが多用される。タイは「仏教の国」と呼ばれるほど、仏教の考え方が人々の日常生活に浸透している地域である。タイでは、ハスの花のみならず、ハスの地下茎であるレンコン、ハスの実、葉がそれぞれの場面で使用される。本調査では、上述の部位の違いを念頭に置きながら、チャイナタウンを含むバンコク市内におけるハスの販売や利用状況に関する情報をできる限り収集することを目指した。以下、時間軸に沿って調査内容を報告する。

2024年8月16日、ワット・プラケオやワット・アルンといった寺院で、ハスの花がどのように使用されているのかを観察し、ビデオを撮影した。8月18日午後、チュラロンコン大学の近くにある市場（Samyan マーケット）を訪問し、ハスの地下茎であるレンコン、ハスの花、ハスの実の販売状況について聞き取りを行った。8月19日午前、タイで暮らす中国籍の大学院生（20代、女性、山東省出身）を対象に、タイでの生活や華人のネットワ

ークについて聞き取りを行った。8月19日午後、ヤワラートの主要道路の両側にある売店、市場、レストランを対象として、ハスの販売や利用状況に関する情報を収集した。8月20日、ヤワラート歴史センター、ワット・マンコン・カマラワート（龍蓮寺）、サイアム博物館、パーク・クロンフラワーマーケットを訪れ、チャイナタウンの歴史や華人社会におけるハスの利用状況について調べた。

## B. 国際会議への参加

報告者は、『Inaugural Conference of the Society of Asian Food Studies & The 14th Asian Food Study Conference（第1回アジア食学学会会議及び第14回亜洲食学論壇）』に参加した（8月17日～8月18日、於チュラロンコン大学）。「Plant-Based Foods in Economics and Trade（植物由来食品の経済と貿易）」というセクションにおいて、「The Expansion of Commercial Lotus Farming in Inland Rural China」と題した発表を行った。

亜洲食学論壇は中国、日本、タイなど世界各地からの研究者で構成される国際的な学術会議である。2011年の発足以来、アジアの食文化研究（特に学際的な食学研究）と食学文化交流事業と食文化の発展を目標としてきた。2024年、中国・日本・タイの研究者によって亜洲食学学会が正式に成立し、亜洲食学論壇は、亜洲食学学会の重要な年次活動として継続されている。

本大会は「Plant-based Diet（植物性優先の食のあり方）」に焦点を当てており、世界中の食学に関わる研究者に、植物性食品優先の食のあり方に関する研究、およびその実践や困難について共有することを目的としている。

広義の植物性優先の食のあり方とは、植物性食品を奨励し、同時に動物性成分や加工食品の消費を減らすという食生活様式と定義される。自然環境の保護に対する意識が高まるなか、肉食にまつわる問題が浮上した。畜産業界が生み出す廃棄物の問題が一つの例として挙げられる。また、過去10年間、肉食を減らすこと健康上の利点に関する研究が増え、植物性優先の食のあり方が更なる人気を博している。さらに、中国・日本・タイなどのアジア各国の食生活の歴史を振り返ると、植物性優先の食のあり方は重要な役割を果たしている。このことは大会の基調講演にも表れていた。

タイ民間医薬と健康協会会長を務める Usa Klinhom は、ナムプリックの例を取り上げた。ナムプリックとは、唐辛子、にんにく、ライム果汁などをすりつぶしてペースト状にしたタイ料理である。季節や地域ごとに、異なるナムプリックがタイの国民の食卓に出る。ナムプリックに使用される野菜類には抗酸化作用と抗炎症作用をもつ成分が含まれる。しかし、現在、タイにおける若年層のほとんどは、これまで蓄積されたナムプリックまたは野菜に関する知識が乏しい。佐藤洋一郎教授（ふじのくに地球環境史ミュージアム 館長）は、納豆を環境負荷の少ない未来の保存食として守り伝えていこうとする取り組みを紹介した。報告者にとって、そこで取り上げた事例はこれまで意識してこなかった新たな知識であった。さらに、趙栄光教授（亜洲食学学会 名誉会長）は、まず、中国の飲食文化史を振り返りながら、植物性優先の食のあり方は中国の食文化史における基本的な形態であることを説明

した。趙教授は、工業化した食品生産において生じる健康問題を「industrial food chain diseases」として定義した。特に化学肥料と農薬の過度な使用が深刻な問題である中国において、植物性優先の食のあり方はその問題の解決につながると主張した。趙教授は、消費者（いわゆる食べる側）の視点をとっている。報告者は、ハスの生産と加工の現場で調査した。生産者側から見れば、化学肥料と農薬の過度な使用は避けられない面がある。その仕組みを明らかにすることが肝要だと感じた。

基調講演の後、中国・日本・タイ・カナダなどの研究者や食文化研究に関心を抱く実務家による発表があった（合計 33 人）。報告者は、「**Plant-Based Diet, Food Ethic and Ecology**（プラントベースフード、倫理と生態）」、「**Application of Plant-based Foods in Chinese Society**（中国における植物性食料の利用）」、「**Comparison and Exchange of Food Culture**（食文化の比較と交流）」、「**Plant-Based Foods in Economics and Trade**（植物由来食品の経済と貿易）」の 4 つのセクションを聴講した。

#### ●学会発表について

本発表では、農地の集約化と農業の近代化を目指す開発が進む中、中国内陸部（湖南省 X 鎮）の農村における商業的なハス栽培の拡大に着目した。「上合」というハスの実の加工を行う加工所へハスの実を出荷する 5 つの生産者グループを対象とし、X 鎮における商業的なハスの大規模栽培の拡大の実態、および集約的な栽培においてハス栽培者が直面する課題を明らかにした。

まず、農業開発の政策のもとで、X 鎮における商業的なハス栽培の拡大のもたらした地域社会への影響を概観し、調査地を紹介した。続いて、ハス栽培の手順と特徴を説明し、ハスの生物学的特性と X 鎮における就業形態が商業的なハス栽培の拡大の要因となっていることを明らかにした。そのうえで、現地調査に基づき、生産者グループの形成、蓮田での労働の実態を説明した。結論として、X 鎮におけるハス栽培事業の拡大過程において、血縁や姻戚関係、地縁関係などの既存の社会関係が重要な機能を発揮してきたことを明らかにした。

#### ●本事業の実施によって得られた成果

##### 1. 現地調査で得られた成果

バンコクではハスの花、レンコン、ハスの実、葉の販売と利用に関する情報を収集した。具体的な内容は論文の中で記述する。調査を通して、中国とは対照的に、食材としてのハスの実やレンコンよりも、ハスの花（儀礼用・観賞用・モチーフ）はタイの国民生活に欠かせないものであるということが明らかになった。また、ハスの花を除き、ハスの実やレンコンはほとんど中国から輸入されたものである。そして、ハスの実とレンコンの調理法や味付けの違いから、ヤワラート地区に移住した華人の特徴がうかがい知ることができる。

本事業の調査で得られたこれらのデータをまとめて、次回の亞洲食学論壇または生き物文化誌学会の年会で発表する予定である。また、これらのデータを中国内陸における現地調査で得られたデータと比較することは、今後の博士論文の執筆に重要な示唆を与えうるも

のである。

## 2. 学会発表から得られた成果

上述のように基調講演から「植物性優先の食のあり方」をめぐる最新の研究動向を把握することができたことに加えて、ハス栽培に関する報告者の研究を進めていくうえでの新たな視座を得ることができた。また、報告者の発表に対するコメンテーターであった阿良田麻里子教授（立命館大学）から蓮田における労働者と雇用者の関係および中国の土地制度に関するコメントおよび質問をいただくことができた。これらは報告者が、博士論文の執筆を進めていくうえで有用なものである。

### ●本事業について

本事業の採択により、バンコクでの学会参加と調査活動が可能となった。学会発表を通じて博士論文の執筆を進めていくうえでの重要な示唆が得られた。また、バンコクで調査においても博士論文の執筆を進めていくうえで貴重な調査記録が得られた。本事業の採択に携わってくださった先生方並びにサポートしてくれた事務の皆様は心より御礼を申し上げます。今後とも学生派遣事業が継続されることを切に望む。

そして、バンコクで一緒に調査を行った劉征宇さん（国立民族学博物館・外来研究員）、謝春游さん（華僑大学・講師）、胡嘉原さん（上智大学・大学院生）、および調査にご協力頂いた皆様に対して厚く感謝申し上げます。